思い出いっぱいありがとう
ペイントアートで学び舎とお別れ

昨年閉園した燕北幼稚園で、卒園した子どもたちや旧職員によるペイントアートが行われました。11月から始まった園舎の取り壊しを前に、最後の感謝を伝えました。

●燕市の中心的な幼稚園

昭和48年4月1日、燕北小学校の3つの教室を借り、57人でスタートしました。昭和56年には新しい園舎へ移転し、多くの子どもたちを見守ってきました。

園舎の老朽化や園児の減少などにより、令和2年3月31日に閉園しましたが、47年間で865人の園児を送り出しました。

●新しい形のお別れ

新潟県を中心に活動する「クリエイターユニット40（ヨンマル）1」代表のシマダマサノリさんは、2年ほど前から、解体前の建物を使ったアートを手がけています。

「園舎で最後に思い出を作りたい」という燕北小の校長先生からの相談を受け、今回のイベントを企画しました。

当日の参加者は約50人。明るい声とともに園舎を染めていく子どもたちの楽しげな姿に、大人にも笑顔が溢れます。

懐かしい遊具で遊んだり、久しぶりの再会に喜び合う姿も多く、当時の活気を思わせる賑わいを見せました。

「色を塗るのは楽しいけど、幼稚園がなくなるのはすごく寂しい」。そんな子どもたちの気持ちは、きっと園舎にも届いているはず。

秋の深まる10月の終わり、楽しさと寂しさが入り混じる印象深い一日となりました。

▼窓に並ぶ感謝のメッセージ。楽しいことも悲しいことも、ここで学びました。

interview

シマダ　マサノリさん

クリエイターユニット 401 代表

●アートの力で
もう一度スポットライトを当てたい

今回のテーマは「星」です。星が亡くなるときに一番光る「超新星爆発」をモチーフにしました。

自然物は朽ちるときに一番輝き、私たちに思いを馳（は）せる機会を与えてくれます。建物も最後にアートの力で光り輝き、卒園生たちからその存在を思い出してほしいと考え、黄色をメインカラーにしました。

●地元への希望、楽しい未来を示す

今回のイベントを通じ、元気だった時代の一端を見ることができました。建物も最後にみんなに会えて、嬉しかったと思います。

子どもたちに対しても、地元でこんなに面白いことができるんだと示せたことが良かったですね。